

〈5〉「大谷石」を活かした宇都宮の生活景の創造に関する研究

市政研究センター 専門研究嘱託員 岡田 雅代

1 はじめに

(1) 宇都宮市の景観について

近年、雑誌で「醜い景観25選」¹としてJR宇都宮駅前の景観が取り上げられたことや、中心市街地の活性化を目的とした二荒山神社参道に隣接する再開発事業を巡る景観問題²が浮上したことを契機に、本市の景観が地元紙などで取り上げられる機会が増え、景観に関する市民の関心も高まってきている（写真1～4）。

宇都宮市の景観行政を概観すると、平成3年の都市景観基本計画の策定から、景観法に対応した景観条例、及び景観計画が決定した平成19年現在で16年の歳月を経ている（表1）。普及啓発事業については11回目になる宇都宮市まちなみ景観賞や、うつのみや百景の選定等が継続的に行われ、本市でも市民・事業者・行政の協働による景観まちづくりを進める機が熟しつつあるといえよう。

(2) 生活景の定義と着目する意義

先に触れた景観法の制定は、本市のみならず全国的に景観への関心を高めた。景観という用語が一般化する一方で、しばしば狭義に使われ、デザインに配慮した施設整備や、駅前の顔づくりに代表されるような重点的な取組、あるいは高層ビルのボリュームや高さをめぐる論争に特

化して用いられることもある。

後藤（2007）は、ドイツ語のLandschaftの訳語として明治期に地理学分野で使われ始めた「景観」の本来の意味は、地域的な概念をともなっており、身近な「生活景」に着目することで、風景と地域が一体であることが理解しやすいと指摘している。



写真1 JR宇都宮駅前



写真2 二荒山神社周辺再開発竣工前



写真3 二荒山神社周辺(2007年12月現在)

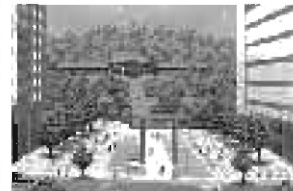


写真4 二荒山神社周辺再開発完成イメージ図

写真1・2・4は本市HPから、写真3は筆者撮影

表1 宇都宮市の景観施策変遷と景観賞の選定数

年	景観施策	景観賞選定	まちなみ	岡左賞
H3	1991 都市景観基本計画			
H4	1992 宇都宮市まちなみ景観賞	〇1	5	
H5	1993			
H6	1994	〇2	3	
H7	1995			
H8	1996 専門係の設置	〇3	4	
H9	1997			
H10	1998	〇4	3	
H11	1999			
H12	2000	〇5	5	
H13	2001 都市景観ガイドライン			
H13~H14	2001~ うつのみや百景選定(1,020件の応募)	〇6	3	1
H15	2003 うつのみや百景選定	〇7	3	1
H16	2004 〈景観法制定〉	〇8	3	1
H17	2005 〈景観法施行・景観行政団体〉	〇9	4	
H18	2006	〇10	2	1
H19	2007 景観審議会発足 景観計画・景観条例決定	〇11	3	
H20.1	2008 景観計画・景観条例施行			
			38	4

注：中核市である宇都宮市は景観法の施行とともに自動的に景観行政団体に移行した。

本市HP及び本市都市計画課資料から作成

¹ 「文藝春秋」2005年8月号

² 二荒山神社参道西側の宇都宮馬場通り西地区の高層化による再開発が、景観問題を巻き起こし係争中である（平成20年3月現在）。

また、その概念を以下のようにあらわしており、専門家によるこれまでの議論³からも、おおむね、生活景は日常的な人々の関わりや営みが見え隠れする景観であると理解してよいだろう。

景観の概念「景観」＝「風景」＋「地域」⁴

このように景観の中でも、とりわけ生活景に着目することで、行政主導による駅前や中心市街地などの景観施策や景観問題だけでなく、身近な景観として市民自らも関わることとなり、市域全域が景観まちづくりの対象となり得るのである。一方、地域や人々の営みと密接に関係のあった生活景は、ライフスタイルや産業構造の変化、あるいは経済のグローバル化などにより変化しつつある。こうした現実を踏まえ、古き良き昔の生活景の保全だけでなく、現代の私達にとって居心地の良い生活景の創造は喫緊の課題であるが、筆者は地域資源を活用したボトムアップ活動型の景観まちづくりが鍵だと考えている⁵。

(3) 研究の枠組と目的

そこで、本研究⁶では、地場材料であり地域資源でもある大谷石に着目し、2章において大

³ 日本建築学会都市計画委員会都市景観小委員会は、平成17～20年度の中心テーマを「生活景」としており、筆者も参画している。

⁴ 後藤春彦『景観まちづくり論』学芸出版社、2007年、51・63頁

⁵ 岡田雅代「普及啓発型の景観賞からボトムアップ活動型の景観まちづくりへの展開―世田谷区風景づくり条例のケーススタディー」『住宅』VOL.56、2007年7月、56-63頁

⁶ 岡田雅代「大谷石がもたらす宇都宮の生活景のポテンシャル―小さな物語と共感のある暮らし方を探して―」『生活景のポテンシャル』日本建築学会大会（九州）都市計画部門PD資料、2007年、101-106頁をベースに加筆修正した。

谷石の歴史と宇都宮の生活景を概観したうえで、3章において①建材としての大谷石、②産地であり採掘場（跡）のある城



図1 宇都宮市大谷町の位置

筆者作成

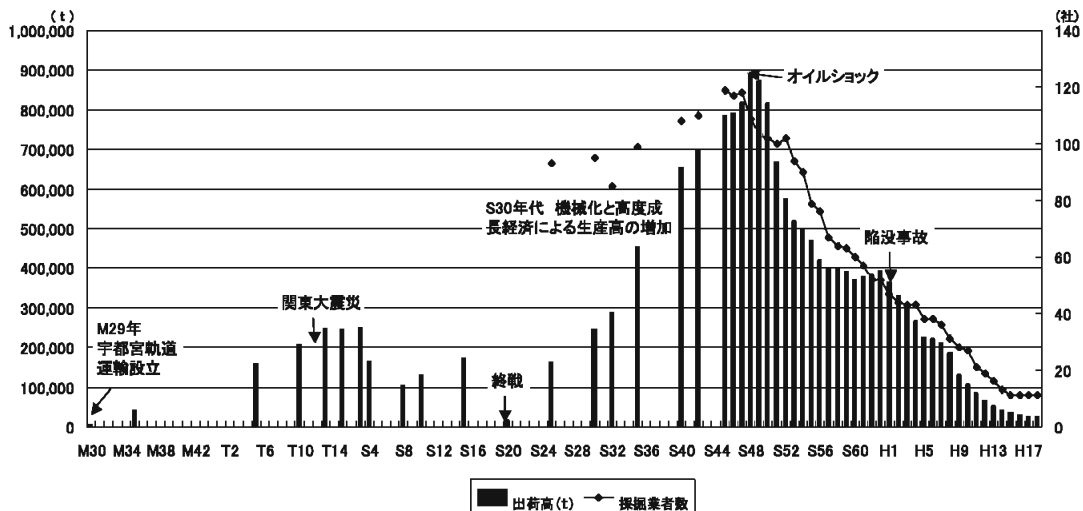
山地区大谷町（図1）、③市内に数多く点在する大谷石の建造物や石塀等についてのおおむね3つの観点から、それぞれの現状と課題について整理を行う。それらを総合し、4章において「大谷石（建材・大谷町・点在する建造物や石塀）」を活かした宇都宮の生活景の創造に向けた今後の可能性について提示する。

2 大谷石の歴史と宇都宮の生活景

建材としての大谷石は、建造物や石塀だけでなく、擁壁や駅のホーム、廃材を再利用した車止めや踏み石、庭先に野積みされた風景など、宇都宮市民の日常生活の中に溶け込んでいる。そのため、無意識のうちに見過ごされ、地域資源としての重要性について、認知されているとはいえないのが現状であろう。そこで、これまでの大谷石の歴史を振り返りながら、大谷石によってもたらされた宇都宮の生活景の魅力と重要性について述べる。

(1) 大谷石の歴史と概要

緑色凝灰石の大谷石は、関東を中心に広く親しまれてきた。たとえば、山手線内にある擁壁や公園で、あるいは昭和初期に開発された都内の住宅地や、昭和30～40年代に開発された東京近郊の住宅地などで擁壁・塀に使われたたく



注：明治30年から昭和43年の間はデータのある年のみ表現

図2 大谷石出荷高と採掘業者数の経年変化

大谷石材協同組合「大谷石出荷高・従業員数年代別推移」資料から作成

さんの大谷石を発見する⁷。

県内では、古代より姿川・田川流域の古墳や下野国分寺の建立に使われ、近世では宇都宮城の改修時などにも使われていたが、江戸時代前期には始まっていた大谷石の採石は、農業の合間の仕事として行われている程度であったという⁸。

明治に入り、国をあげて近代化を進める中で、大谷石の搬出と観光客輸送を目的に、明治29年には人車鉄道の宇都宮軌道運輸⁹が設立された。翌年、宇都宮西原町～大谷荒針間で開業し、明治36年には始発を材木町、路線を鶴田駅まで伸ばしたことが採石の本格化につながり、大谷石は関東一円に建材として広まった¹⁰。

大正に入ると、建築家フランク・ロイド・ラ

イトと弟子の遠藤 新により大谷石が多用された。関東大震災で帝国ホテルが壊れなかったことからその名が広く知られるようになり、採掘業者が増加したという。

昭和に入り、出荷高は一時落ち込んだが、戦後、昭和30年代に、手掘りから機械式チェーンソーによる採石へと変わったことや、高度経済成長を背景として、昭和40年代後半をピークに擁壁や石塀などに多用された(図2)。しかし、オイルショック以降、急速に出荷高は減り、バブル期にはいったん持ち直したものの、後述する採掘場跡(以下「廃坑」という)の陥没事故の影響もあり、出荷高は減少し続けている。廃坑をめぐる安全確保の問題も起こり、大谷町周辺では現在も重い課題となっている。

⁷ 以下の文献でも明治期に武家屋敷から住宅地へと転換して形成された山の手の概念が、戦後その郊外へ広がると同時に、大谷石が街並を飾っていったことが指摘されている。三宅正弘『石の街並みと地域デザイン』学芸出版社、2001年、136-139頁

⁸ 宇都宮市教育委員会文化課編『宇都宮の石造建造物』宇都宮市教育委員会、1997年、2頁

⁹ 後に東武大谷線となり、昭和39年に廃止した。

¹⁰ 宇都宮市制100周年記念事業実行委員会編『写真でつづる宇都宮百年』宇都宮市政100周年記念事業実行委員会、1996年、12-15頁

(2) 大谷石のある宇都宮の生活景

市内には大谷石の構造物や建造物が4,000～5,000あると言われている¹¹。栃木県建築士会宇都宮支部まちづくり委員会による調査では、

¹¹ 矢作 弘、末松 誠『産業遺産とまちづくり』学芸出版社、2004年、83-96頁。なお、平成19年3月末、旧上河内町・河内町を編入合併し、市域が拡大したため、その数はさらに増えたと考えられる。

市内中心部に370あることが明らかになった¹²。

大谷石の建造物には、国指定重要文化財や国登録有形文化財、あるいは県指定有形文化財や戦前に上層農家により建てられた蔵だけでなく、戦後、農家の地位向上とともに富の象徴として建てられた蔵や、農機具の機械化による業務用倉庫が増加した（写真5～8）。こうした蔵や倉庫はともかく、住宅地など市内の至るところで見かける大谷石の石塀までを対象に含めれば、正確な数は把握されていないのが現状である¹³。

歴史や建築的な価値の如何に関わらず、大谷石の建造物や石塀が集積し、面としてまとまっていたり、それらが田園と調和した光景に出合ったりすると、日本でも珍しい景観なのではと感じずにはいられない（写真8～10）。これらは宇都宮の生活景とってよいだろう。しかし、その多くは旧道沿いにあり、道路の拡幅と同時に取り壊されたり、輸入物の石塀に取って代わられる危機にさらされている¹⁴。

そこで、大谷石が共有財産であることを再認識し、大谷石のある宇都宮の生活景を取り上げながら、景観まちづくりの手がかりとして活用することが重要と思われる。

3 「大谷石」をめぐる現状と課題

¹² 下野新聞2006年7月28日朝刊によるが、塀はこの数に入っていないと推察される。旧市内の多くは昭和20年7月の戦災により焼失した。

¹³ 大谷石の建造物に関する資料として、本市教育委員会による文献のほか、以下が挙げられる。①宇都宮まちづくり推進機構「石の街 うつのみや景観・建築マップ」2006年 ②NPO法人大谷石研究会編『大谷石百選』NPO法人大谷石研究会、2006年

¹⁴ 大谷石材協同組合によると、この2、3年の間に中国産御影石の石塀が増えているという。価格が大谷石に比べ安価であることと、あらかじめ加工されているため工事費も安くなることがその背景だと思われる。

(1) 建材としての大谷石について

1) 出荷高の経年変化

図2のように、大谷石の出荷高は、高度経済成長期に上昇した後、年々減少しており、採掘業者数がピークの昭和45年から平成18年まで、



写真5 国指定重要文化財 旧篠原家住宅（今泉）

本市HPから



写真6 小野口家石造物
国登録有形文化財
（田野町）



写真7 渡辺家石蔵
県指定有形文化財
（大谷町）



写真8 装飾のある蔵や塀が集積した西根集落
（徳次郎町）



写真9 集積する大谷の
蔵や塀
（戸祭元町）



写真10 田園風景と一体化
した倉庫と塀
（砂田町）

写真6～10：筆者撮影

採掘業者数は出荷量とおおむね連動している。しかし、売上に関しては、平成元年前後から一時上昇した後、出荷量の減少に比べ、緩やかなカーブを描いて減少している(図3・4)。特に、M字型の山になっている平成2～4年は、バブル経済の余波による建材全体の価格上昇が影響しているものと思われる。採掘業者数は11社と、平成15年から横ばいで、平成17年からは出荷高・売上共に安定しつつある。

出荷高の減少は、国内の景気低迷など需要側の変化もあるが、廃坑の安全性の課題や良質の大谷石の減少といった供給側の要因もあり、今後採掘可能な大谷石だけでなく、建造物や石塀として身近にある、既存の大谷石も重要なストックとして再認識する必要があるだろう。

2) 価格面からみた現状と課題

表2は、平成18年の大谷石の標準価格を示している。経年比較するデータはないが、昭和の暮らしを紹介したHP¹⁵によれば、大正14年の六十石(ろくとういし)の価格が「1本当たり1円3銭(米価を基準に現在の価格に換算すると約1365円)。大谷石の採掘は手堀りで行われ、1日1人が切り出せる量は六十石で12本程度だったため、価格は高くならざるをえなかった」と紹介されている。単純な物価の比較はできないが、現在の六十石の価格は中目材で7,460円になり(表2)、通常のフェンスや石膏・セメント系のボードなどに比べると、高価な材料となっていることは確かである。

このように、現在の大谷石は割高感がある中、市内でたびたび見受けられる御影石など、大谷石以外の新しい石塀への変化は、果たして価格

だけが原因だろうか。中国産御影石は、敷地の広い旧家でも多用されていることから、財力に余裕のある家ほど御影石に変わっている可能性もある。これは、地場材料に特化せずに石材を販売する事業者の営業活動や、消費者にとっても選択肢が増えるなど、複数の理由が想定され、価格だけが原因でないと思われる。したがって、外構も含め、地場材料が活用されるよう、機運

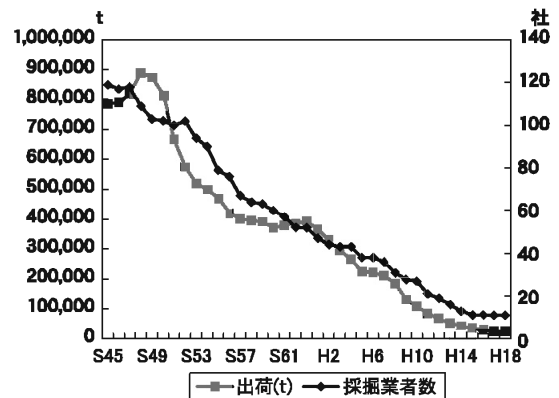


図3 大谷石出荷量(t)と採掘業者数の比較

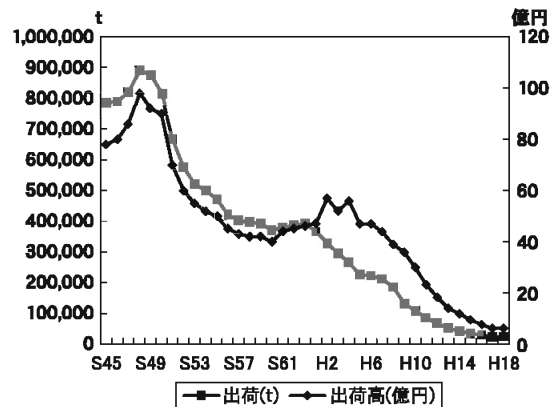


図4 大谷石出荷量(t)と売上(出荷高・億円)

図3・4: 大谷石材協同組合「大谷石出荷高・従業員数年代別推移」から作成

表2 大谷石標準価格比較表(H18.4.1現在)

銘柄	標準寸法	tあたりの数量	細目材	中目材	荒目材1級品	荒目材並品
	厚×巾×長(m/m)					
六十石	180×295×900	11	8,560	7,460	6,340	5,080
一寸板	30×295×900	67	4,610	4,080	3,530	—
二寸板	60×295×900	32	5,090	4,480	3,870	—

大谷石材協同組合資料から引用

¹⁵ アカデミア青木「第26回 塀は世につれ～コンクリートブロックVS大谷石～」『まぼろしチャンネル 懐かしデータで見る昭和のライフ』

http://www.maboroshi-ch.com/ata/lif_26.htm

の醸成も含めたインセンティブが必要である。

一方、近年、大谷石が店舗を中心に内・外装で多用されるようになっており、その理由の1つに、パネル化した大谷石を乾式工法やボンド張り工法により施工するため、熟練した石工でなくとも施工が可能になっていることが挙げられる。このように、石材を使う側としても、パネル化した大谷石の方が材料費が安くなるだけでなく、工期が短縮でき、工事費も安くなるものと思われる。t当たりの数量は六十石では11だが、一寸板だと67になり、同じ出荷高で約6倍の数量が確保できるうえ、価格は六十石の約半分なので、石材を提供する側にとっても効率が良い(表2)。使う側・提供する側の双方において、パネル化による大谷石の活用は、価格面からのメリットが大きい。

3) 大谷石の風化と修復に関する課題

大谷石には、汚れやすく風化しやすいといった欠点もついて回る。しかし、現在は、仕上げに風化防止剤を刷毛で塗る方法や、再生方法が考案され事業化されている。たとえばA社は、洗浄・表面削り・はつり・大谷石パネルの圧着・風化防止剤を組み合わせた数種の手法を提示している。

このように、新たな積み替えによらず、大谷石の建造物や石塀を修復する手法が事業として確立されつつあるが、広く普及するまでに至っていない。既存の大谷石の建造物や石塀が修復可能であることの周知や、修復を中心とする事業者の開拓、修復技術の一般化も必要と思われる。

4) 防犯・防災面などの安全性からみた課題

大谷石に限らず、高い塀はプライベートが確保されるが、外から見えないことから、空き巣に狙われやすく、近年、住宅地ではこれを避ける傾向がある。

また、新興住宅地では、緑化や景観への配慮から生垣を奨励するほか、敷地の狭小化や世帯ごとに車を保有することから生じる、前庭における駐

車スペースの確保、さらにガーデニングブームにも後押しされ、外構廻りをオープンにした敷地境界部分のセミパブリック化が進んでいる。

防災面からは、ブロック塀の崩壊による死者が出た昭和53年の宮城県沖地震以降、建築基準法の改正や(社)日本建築学会による設計基準が定められ、「組積造のへい」に関しては、高さ1.2m以下とすることや、壁厚・控壁・基礎の根入れの深さなどの仕様、配筋の間隔などが規定された¹⁶。同じく防災上の理由から、生垣やフェンスを奨励し、ブロック塀等の撤去に対して補助金を出す自治体も少なくない。このように、防災の観点からも高いブロック塀や石塀は歓迎されなくなった。擁壁に関しても、たとえば、昭和30~40年代に大谷石が多く使われた横浜市では、経年による劣化を理由に現在は許可していない。

市内では、大谷石の5段積み(1.5m)以上の控壁のない塀や、老朽化した擁壁が散見されるが、現在の構造基準を満たしていない可能性が高く、安全性からも、適切な修復や改善が必要である¹⁷。

このように、安全性の問題や、現在では既存不適格となってしまう大谷石の建造物や石塀が市内に数多くある。大谷石のある生活景の保全と、安全性が相反することがあり、大きな課題である。

本市では、建築物耐震改修促進計画を策定し、平成19年7月より、昭和56年以前に建設された住宅等の建造物に対し、耐震診断・改修の助成制度を行っている。既存の大谷石の建造物や石塀などのストックを活かせるよう、専門的な技術支援や、石塀・擁壁も助成対象とするなどの方策について

¹⁶ 建築基準法施行令第61条による。

¹⁷ 現行の基準に満たない石塀に関しては、高さを抑え、適切な配筋を行うなどの処置が適切と思われる。その際、解体して積み直す手間が生じるものと推察されるため、積み直しによらない修復技術開発が待たれる。

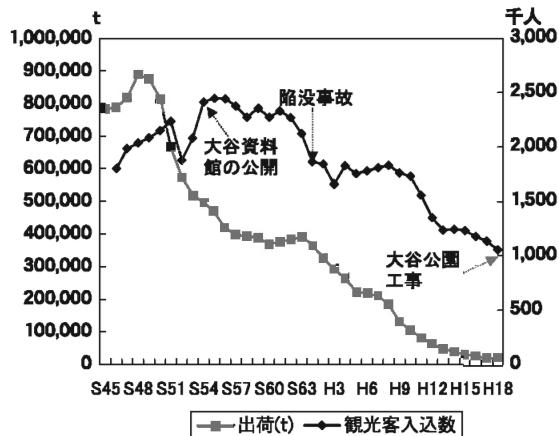


図5 大谷石材出荷高と観光客入込数比較

大谷石材協同組合「大谷石出荷高・従業員数年代別推移」資料及び本市観光交流課資料から作成

も検討が必要だと思われる。

(2) 採掘場（跡）のある大谷町について

1) 廃坑と陥没事故

本市産業政策課によると、産地である大谷町付近には、4×6 kmの中に、およそ250か所の廃坑があるという。古くは露天掘りで採石されていたが、地下に採掘場を求め、機械化も加速し、さらに地下深く、あるいは横へと掘られていった。その結果、地下空間が巨大な迷路のようになっている。

こうした廃坑の1つが、平成元年2月、畑に大きな隕石でも落ちたかのように突然陥没し、全国的なニュースになった。この大陥没を機に、安全性への不安や県の採石許可の厳格化から、観光客や石材業者も激減し、大谷町の活気は急速に失われていった（図5）。

2) 廃坑の安全対策

また、陥没の前後から廃坑へ安定5品目の産業廃棄物の受入が行われるようになったが、そうした廃坑の1つで平成13年8月に爆発事故が起きた。その事故原因がはっきり特定できていないことなどから、地元住民から不安の声があがっている¹⁸。

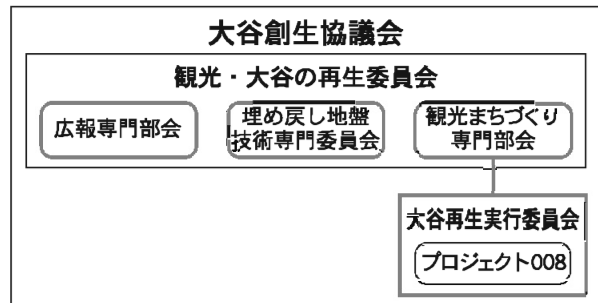


図6 大谷創生協議会と委員会

本市産業政策課資料

採石許可の際、廃坑への埋め戻しは義務化されていないが、廃坑の安全性に関する責任は採石した原因者にあるとして、埋め戻しに関しては、県も市も公的に介入する予定はない¹⁹。実際、埋め戻しを土砂で行うと多額の費用がかかるため、土砂で埋め戻された例は少なく、仮に全廃坑を埋め戻すとなると莫大な費用がかかり現実的ではない。

そこで、土砂や安定5品目に代替するものとして、自治会・大谷石材協同組合・地元市議等をメンバーとする地元組織「大谷創生協議会」内の大谷再生実行委員会により（図6）、市や国と協議しながら特区申請の検討が行われ、熔融スラグを用いた埋め立て処分の採用が平成16年に決定された²⁰。しかし、地元自治会の調整が難しいことから最終申請の見送りが続いている、熔融スラグの有料化など採算面でも逆風が吹き始めている。

このように、巨大な地下空間としての廃坑は、大谷町だけでなく、観光や産業振興等の面から本市の大きな課題である。

(3) 市内に点在する大谷石の建造物等について

これまでの本市教育委員会による調査や、地

¹⁸ 同年、市議会議長宛に地元自治会から行政代執行による廃棄物除去と現状回復を求める陳情書が提出されている。

¹⁹ 安全性の見地から公道下の廃坑は埋め戻された。

²⁰ 下野新聞2006年11月6～11日朝刊特集「特区の行方 大谷大陥没から17年 1-6」を参照した。

元の専門家等による努力²¹が実り、大谷石の石蔵、長屋門、倉庫などの建造物の価値が見直されつつある。単体の建造物もさることながら、2章で触れたように、市内や周辺地域を車で走ると出会う大谷石のある生活景にも価値があると筆者は考えている。しかし、大谷石の壁面や石塀に看板が設置されるなど、その価値を台無しにするような光景にも出会うことがある。

さらに、面としてまとまった大谷石の集積地区は意外に少なく、それらも分散しており、建築に関心の少ない市民や外来者には認知されづらい。

こうした、点在する名もない大谷石の建造物や石塀を活かすためにはどのような方策が考えられるだろうか。たとえば、目録としてリストアップすることを目指し、大谷石のある生活景発見に向けたソフト事業を行う。次に、歴史的・建築的価値の如何にかかわらず、それらを地域資源としてマップに落とし込み、大谷石のある生活景として取り上げる。それと同時に、取り上げた地域資源の活用方策についても、市民や専門家を交えながら検討する必要があるだろう。

4 「大谷石」を活かした生活景の創造に関する可能性

以上、3章で述べたように「大谷石」に関する課題は多い。建材としての課題については、修復や改善に関する技術支援や助成、大谷石を活かす機運の醸成などが必要だが、本章では、大谷町や点在する建造物等を中心に、現在行われ始めた取組や試論を、今後の可能性として紹介する。

²¹ 栃木県建築士会宇都宮支部、NPO法人大谷石研究会、宇都宮まちづくり推進機構大谷石・石蔵部会などの活動が例として挙げられる。

(1) 大谷町における今後の可能性

1) 産業遺産としての地下空間の有効活用

大谷町にある緑色凝灰石の奇岩群が、自然的名勝として平成18年に国の名勝に指定され、県内では日光市に次ぐ75年ぶりの指定となった。

一方、人工物の廃坑について見ると、横に広がる大規模な廃坑が、「大谷資料館」として昭和54年から公開されており、訪れた人の多くは、巨大な大谷石に囲まれた神秘的な地下空間に感動する。夏でも約8℃前後に保たれていることや、うまみを増すなどの効用がある²²ことから食品の貯蔵庫として使われるほか、ファッションショー・コンサート・アートスペース・研究の実験場としての活用実績があり、今後もその有効活用が期待されている。他の廃坑についても安全性の確保を行ったうえで、産業遺産として地下空間を有効活用するような方向性についても検討すべきであろう。

2) 地域再生と文化的景観への取組

こうした中、大谷町の地域活性化に向け、いくつかの取組が行われ始めている。その1つが、「大谷地域文化観光再生計画（第1期：平成16～18年）」である。再生計画関連施策・事業としては、まず、先の奇岩群の名勝指定に向けた取組があり、もう1つが、廃坑を産業遺産とした文化的景観²³の重要地区指定に向けた取組である。選定条件の1つには景観計画区域の設定があるが、現在、景観条例の重要地区として大谷町を指定する方向で準備が進められている。

その他の再生計画関連施策・事業としては、前述の特区申請や安全対策の検討、大谷観音周辺の大谷景観公園の整備などがあり、「大谷観光推進基本計画」（平成16年）と連動して行わ

²² 本誌「大谷石効果の産業活用調査」（73-76頁）を参照のこと。

²³ 人と自然の関わりの中で作り出されてきた景観のこと。平成16年の改正文化財保護法により、文化財として位置づけられた。



写真11 陶芸作家が主宰する陶遊社（大谷町）



写真12 アート関係者が集積する「かやぶきの家」周辺（大谷町）



写真13 花の織展の開催により庭も公開する「かやぶきの家」(大谷町)



写真14 庭木を利用した生け花のある同左エントランス



写真15 「かやぶきの家」で展示即売される作品



写真16 同左休憩所から見える庭と蔵



写真17 まちなみ景観賞を受賞した屏風岩の左右入口に建つ蔵だけでなく私有地にある自然を取り込んだ見ごたえのある庭（大谷町）



写真18 私有地の大谷石の道・擁壁・堀・倉庫・井戸など絵になる風景（大谷町）



写真19 第12回大谷石・石空間フォーラムの会場となった小野口家前庭での会食（田野町）

写真11～19：筆者撮影

れている。

3) アートの集積と埋もれた地域資源の活用

大谷資料館を利用したイベントは大陥没以前から行われており、そうした活動の影響か、あるいは奇岩群や産業遺産のある大谷町という場所の持つ力のせいなのか、この地域には陶芸家や舞踊家、織物作家などのアーティストが集積しつつある(写真11・12)。

県指定有形文化財に指定されている渡辺家母屋の「かやぶきの家」では、平成19年12月、作家の住人や生徒たちによる「花の織展」が開催され、入口から内部まで、至るところで来訪者へのもてなしがなされていた(写真13～16)。同月には、近くのスタジオで、舞踊家と音楽家によるパフォーマンスが催されるなど、大谷町では、在住アーティストによるさまざまな活動発表が行われている。

その2か月前の10月には、「第8回フェスタin

大谷」²⁴の一環で、大谷資料館でのジャズコンサートや、大谷景観公園での演奏・大谷石夢あかり展などが催された。そして、11月には、宇都宮まちづくり推進機構の大谷石・石蔵部会が開催した大谷町周辺のまち歩きと交流会では、大谷石の石蔵や長屋門のある家を訪れ、蔵の内部や庭なども公開された(写真17～19)。

このように、秋から初冬にかけて集中的に開催された一連の展示や企画は、大谷町の魅力を高め、訪問者を呼ぶだけではなく、大谷町の可能性を体感する機会にもなっていた。大谷町とその周辺で行われる一連の企画が、官民関係なく一目でわかるような情報提供の仕組みがあると、さらに相乗効果が出るだろう。

²⁴ 昭和59年のとちぎ博を機に、大谷観光協会・商店会・宇都宮市により開催されたストーンフェスティバルがその起源であり、その後、地域主体で企画するフェスタin大谷へと発展した。

文化的景観の指定に向けた取組の中で、本市文化課と城山地区市民センターが共催で行っている連続講座や、地区行政に係る施策の中で、まちづくり推進のための普及啓発事業も並行して行われており、地域づくりの観点からも、大谷町のアートや埋もれた地域資源の積極的な活用が必要だと思われる。

(2) 中心市街地における効果的な大谷石の活用と情報発信基地としての役割

前述の「大谷観光推進基本計画」の中には、「まちなかにおける大谷石建造物を活用した情報発信機能の強化」や「観光案内の相互連携」が挙げられている。これまで、市が所有する「旧篠原家住宅」の公開や、国登録有形文化財の「カトリック松が峰教会」のライトアップ、同教会でのジャズ演奏などの取組が行われている。また、中心市街地活性化支援の1つとして、空店舗への出店に対し、内装費や家賃の一部助成などの施策を行ってきたが、平成19年度からは対象を拡大し、平成19年3月に完成した宇都宮城址公園周辺の活性化を念頭に、民家から店舗への転用に対しても助成を行うことになった。その際、石蔵の活用や内装に大谷石を使用した場合には助成額を上乘せし、中心市街地での「大谷石蔵の活用」も支援している。

「大谷石蔵の活用モデル事業」の中で掲げられていた、市所有の「旧公益質屋」をレストランとして活用する構想は、既に事業化が困難な状況となっているが、上記のカトリック松が峰教会に隣接していることから、周辺整備も含めた一体的な整備と活用が期待できる。

このように、中心市街地の活性化や観光施策とあわせ、まちなかの大谷石の建造物を拠点とした、「大谷石」に関する情報発信や案内、まちなかでの効果的な大谷石の使用や、大谷石が

映えるような色や素材に配慮した環境整備を積極的に行っていくことは、「大谷石」の認知だけでなく、宇都宮らしさの創出に向けた重要な取組と思われる。

(3) 点在する大谷石の建造物や石堀の可能性

1) 店舗・アトリエ・SOHOとしての再活用

既存の大谷石の建造物を、現代的に再生させた成功事例が店舗を中心に徐々に増えてきている。たとえば、かつて中心市街地にあったエスニックレストランが大谷町に移転した際に、大谷石造の倉庫を改装して活用しており、同町に新たな活気をもたらしている（写真20）。また、老舗の食品卸問屋は、自社の大谷石造の倉庫を和食創作料理のレストランとして改装し成功している（写真21）。外から見ただけでは、大谷石の建造物であることがわからない場合もある



写真20 エスニックレストランと大谷石の建築物（大谷町）



写真21 竹やツタと調和した和食創作料理レストラン（東堀田）



写真22 店舗（甘味処&器販売）として使われている倉庫（一番町）

写真20～22：筆者撮影

が、腰壁に大谷石が使われた倉庫を、甘味処と益子焼など県内の民芸品の販売コーナーへと改装し、連日にぎわっている店もある(写真22)。そのほか、ダンススタジオ、美容院、ケーキ屋、雑貨店など、こだわりのある事業主により活用されることで、大谷石の建造物が現代的に甦っている。事例としてはまだあまり多くないが、店舗だけでなくアトリエやSOHO、住宅としても活用の余地がありそうである。

2) 現代版家守によるマッチングと大谷石バンクによる建材の再利用

以上のように、大谷石の建造物の現代的再生事例が店舗を中心に増加しつつあるが、この種の取組をさらに活性化するためには、建造物の所有者だけでなく、有効に活用したい人がそれを使えるような方策が必要であろう。そのためには、既存のオフィスビルをSOHOの共同事務所として再生した神田の現代版家守²⁵のように、所有者と活用したい人のマッチングを積極的に行う人や組織が必要である。

一例として、本市でも、中古物件の住まい方を提案しながら紹介しているWEBサイトがある。「栃木県宇都宮市を中心に『そこで営まれるライフスタイル』を重視し、魅力ある物件を発見・紹介するサイトです。こだわりのあるユーザーと特徴(クセ)のある物件のマッチングを行います。」²⁶とあるように、積極的なマッチングをしており、現代版家守の一端を担っているのかもしれない。このような意志をもったコ

²⁵ 家守とは、江戸時代に地主に代わって宅地内の諸事を差配する職業のことである。家守は、資産管理者として賃料を確保し得るため店子の選定から起業育成、町全体のマネジメントまでを担っていたとされる。

(政策投資銀行SOHOコンバージョン家守事業への支援HP

<http://www.dbj.go.jp/japanese/about/project/c11.html>より)。

²⁶ MET Project - 栃木物件案内-HP

<http://www.met-p.com/>

ーディネートは、公平性の観点から行政セクターでは行いがたい。継続性の観点からも、民間やNPOなどによるコミュニティビジネスとしての、大谷石の建造物に関する現代版家守の登場に期待したい。

また、やむを得ず解体せざるを得なくなった建造物や石塀の建材を再利用できるような「大谷石バンク」²⁷についても、民間セクターを中心に中古建材が市場に流通するような方策を検討していく必要があると考える。

3) 大谷石のある暮らしのススメ

① ガーデニングが映える蔵や石塀

近年、発行される住関係の記事を見ると、昭和40～50年代の団地や木造の中古住宅に積極的に住み、自分達のライフスタイルに合わせて改装したり、遊び心を加えながら、古いものと新しいものを再編集したような、成熟した暮らし方が紹介されている。また、ガーデニングの雑誌では、枕木や錆びた古道具を積極的に使い、草木と調和させた庭づくりの楽しみ方が取り上げられている。

大谷石の素材は植栽ととても調和する。市内でも、住宅の一部にある大谷石の壁面に沿ってバラを植えた家や、大谷石の蔵や石塀と調和した庭木を見ると、住まい手がそれらを大切にしていることが感じ取れる(写真23・24)。これは、まさに宇都宮の生活景である。大谷石は、「主役になれない石、他とのコラボレーションで生きる石」²⁸だが、歳月を経た大谷石は、さらに植栽を引き立てる。身近にある石塀や廃材を活用したガーデニングは、大谷石の有効な活

²⁷ 平成20年度からスタートする「第5次宇都宮市総合計画」策定の過程で、市民からも同様な意見が複数出ている。

²⁸ 塩田 潔「大谷石をめぐる課題と展望」NPO法人大谷石研究会編『大谷石百選』NPO法人大谷石研究会、2006年、119頁



写真23 植栽と塀が調和した例 (戸祭元町)



写真24 大谷石の塀と植栽 (12月の大谷町)

写真23・24：筆者撮影

かし方ではないだろうか。

② オープンガーデン・オープン蔵による交流

身近な大谷石を活用したガーデニングが盛んになれば、家々の庭を公開するような取組も考えられる。たとえ小さな庭でも、住まい手の愛着が感じられれば、十分に価値があるのである。年に数回、庭先にある蔵を公開することも考えられる。通年の店舗等への活用は無理でも、ある一定期間のみの活用ならば、より実現の可能性は高くなるだろう。

このような、大谷石のある暮らしの小さな一歩を個々に踏み出すことが、宇都宮の生活景の創造につながると考えている。

5 おわりに

本稿では、「大谷石」を活かした宇都宮の生活景の創造に向けた可能性について試論を提示した。

筆者は、東京郊外を対象とした論考²⁹の中で、生活景の創造について、「地域資源（場所）ごとに、さまざまな主体（人）が関わりながら、課題を一つ一つ解決し、場所ごとに歴史や文化のみならず、現代的な新しい価値を見出し育んでいくしか方法はないのではないだろうか」と

締めくくっている。

宇都宮の地域資源である大谷石で考えてみると、一番小さな単位である、目の前にある個々の大谷石の建造物や石塀を活用した、こだわりのある暮らし方を始めてみるのが、その第一歩と考えられる。たとえば、「大谷石のある暮らし方」のアイデア募集をするなど、行政も市民も一体となって盛り上げることも考えられる。

そして、個々のそうしたアイデアが、場所ごとの小さな物語として話し語られ、近隣へと広がっていく。そんな暮らし方に共感した数軒が飛び飛びでもよいので集まり、大谷石を活かした景観まちづくりのアイデアやプランを、小さな活動を重ねながら練り上げていく。そうした積み重ねが、景観まちづくりの面的展開や、地域資源同士の有機的なつながりへと発展するのではないだろうか。

一方で、行政は近年、新規の公共建築物に積極的に大谷石を使用しているが、周辺にも波及するよう、今後も大谷石を活用した取組を率先して行う必要がある。

以上のように、目の前にある大谷石を活用した、こだわりのある暮らし方や小さな活動により、宇都宮の生活景が創造される可能性が指摘できる。本市全域の大谷石の建造物や石塀を地域資源とし、場所ごとに大谷石がもたらす生活景が各地に出現し顕在化されることで、新たな宇都宮らしい生活景が生まれるに違いない。

²⁹ 岡田雅代「東京郊外の変化－生活景は場所ごとに育まれる－」『変わりゆく生活景』日本建築学会大会（関東）都市計画部門パネルディスカッション資料2006年、27-32頁